

思い通りという道は無し

【治まらない異常気象】

世界各地で猛威を振るう異常気象は、我が日本列島でも人智の及ばない想定外の自然災害を頻繁に起こしています。三月十一日・東日本大震災のマグニチュード九に始まり、各地で発生する地震、水害、寒波、台風、集中ゲリラ豪雨、竜巻など、今まで外国のニュースでしか聞いたことがないような自然災害ばかりで耳を疑ってしまいます。

平成二十六年八月における豪雨は、北陸、東海、近畿、中国、四国など被害地域が広範囲にわたったことから〈平成二十六年八月豪雨〉と称されるほど激しく、なかでも記憶に新しい八月二十日午前三時二十分〜四十分にかけて、局地的な短時間大雨により、広島県の山間部で住宅地背後の山が崩れ、同時多発的に大規模な土石流が発生し、多くの尊い命が亡くなりました。テレビに映し出される被災現場は、目を背けたくなるような惨状を呈していました。七十人を越える死者の死因は、窒息死と脳挫傷だったそうです。どんなにか苦しく、どれほどの悔いを残しておられる事でしょうか…。改めて、お

亡くなりになられた方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

【魂よ永遠に】

被害者の魂が安らかにお眠り頂くためにも、遺された遺族の方々は勿論のこと、今を生きる私達自身が犠牲になられた方々の分も、その魂に適う人生の歩み方をする事が、せめてもの弔いになるのではないかと思います。その意味で何件かの事例を挙げて、今回の〈広島土砂災害〉を振り返りたいと思います。

■救助活動中に死亡した安佐北消防署の政岡則義司令補（五十三歳）は、地域の防犯に尽力するなど正義感が強く地域住民にも慕われていたといえます。そんな政岡さんは、自らが犠牲になった今回の現場でも、救出しようと畑中和希君（三歳）を抱きかかえ、他の住民七人の避難誘導を開始。そのとき、再び発生した土石流に巻き込まれ、近くにいた男児の母親（四十二歳）と三人が生き埋めになってしまいました。午前九時五十五分頃に助け出されましたが、すでに心肺停止の状態で搬送先の病院で、政岡さんと和希君は、お亡くなりになりました。

■湯浅康弘さん（二十九歳）と、みなみさん（二十八歳）の若夫婦も土石流に巻き込まれて、お亡くなりになりました。

湯浅さん夫婦は東京の会社に勤務中に知り合い、昨年十月にめでたく婚姻届を出した新婚夫婦でした。野球やマラソンなどスポーツが得意な康弘さんは、マッサージ師として広島での独立を目指し転職。七月に今回被災地となったアパートに入居しました。みなみさんのお腹には赤ちゃんが宿り、十一月に男の子を出産予定だったそうです。みなみさんはお盆に実家に帰省し、十七日に広島に戻りました。手には子供の名付けに関する本を三冊、借りていったといえます。運命とはいえ、なんと残酷なのでしょう。

■小学校五年生サッカー少年の平野遙大（はると）くん十一歳と、二歳の弟、都翔（とわ）ちゃんも帰らぬ人となりました。はると君は三人兄弟の長男で、二歳のとわちゃんをよく抱っこしていた弟思いの優しい少年だったそうです。はると君と、とわちゃんの葬儀は四百人の参列者が見守る中、広島市内で行われました。遺影の写真は、はると君のブイ・サインの写真と、とわちゃんの可愛い笑顔の写真でした。友達からは「はると！はると！」の叫び声がし、列席していた保護者の親御さんたちも号泣していました。出棺の際、サッカークラブのチームメイト達は手拍子をしながら「はると

のシュートに大きな拍手！はるとのシュートに大きな拍手！」と叫んで送り出しました。このコールをした後、泣き崩れていたチームメイト達の姿に私も涙を堪えることが出来ませんでした。

上の三組は報道された方々を中心にご紹介させて頂きました。この三組以外にも、沢山の方々が被害に遭われました。現場では、被害に遭われた一人一人に人生の物語があったはずですが、警察と消防、自衛隊が三千四百人態勢で必死の捜索を続けられました。

このやり場のない溢れ出る感情を抑えることは出来ません。今回の〈広島土砂災害〉を含め、世界で猛威を振るう近年の異常気象は、私達一人一人に何か課題を提示しているのでしょうか？そんな答えのない答えを模索し続けると同時に、私達は自分自身の事として受け止めることも、今を生きる私達に与えられた使命であると思います。

※我が〈全国日蓮宗青年会〉は、広島土砂災害の支援として、九月八日から第一陣が現場に入りました。今後も息の長い支援を継続する予定であることをお知らせします。

【世界が共感した日本人の慈悲心】

今回の広島土砂災害は、三年前の東日本大震災を想起させられました。まだまだ完全復興には長い時間が必要としている現状ですが、時間の経過は時として残酷なものでもあり、三年という時が経ち、被災地以外の都道府県では既に忘れ去られた感もあります。震災当初、大地震と津波の被害は甚大で、日本中が打ちのめされたような敗北感と悲しみに覆われていました。その一方で、震災に向き合い、自分出来ることを一杯頑張った数多くの人々もいます。そんな名も知れぬ多くの人達の陰の努力によって、ここまで復興し続けてきました。自分の功名の為ではなく、ただ困っている人のために命を惜しまず尽力されている事実があります。そして、その慈悲心からなる行動は何時までも私達の胸に刻み込まなければなりません。その気持ちと行動に世界が日本人を再敬礼しています。

震災によって日本人の心に「支え合う」という『絆』の刻印が押されました。心のスイッチがオンになった時、人間はここまで変われるのです。※以下、証言を抜粋：

●ホームで待ちくたびれていたら、

ホームレスの人達が寒いから敷いて段ボールをくれた。いつも私達は横目で流しているのに。温かいです。●こんな時にも整然とホームに整列して並ぶ日本人すごい。非常に混雑したホームにも、改札の外にも、電車を待つ溢れんばかりの人。でも誰一人列を崩さず、通路を開け、係員の誘導に従っている。ロープがあるわけでもないのに、通る人のための通路スペースが開けてある。その不自然なほどの快適さに、ただただ感動するばかり。●子供がお菓子を持ってレジに並んでいたけれど、順番が近くなり、レジを見て考え込み、レジ横にあった募金箱にお金を入れて、お菓子を棚に戻して出て行きました。●店員さんがその子供の背中に向けてかけた「ありがとうございます」という声が震えていました。●自衛隊員が言った、「死んでも悔いはない！被災地で炊き出しをした際、たとえ余っても自衛隊員は絶対に食べないで缶詰の冷たいご飯を食べます。被災地の人用にお風呂を用意しても自衛隊員は入りません。そして出来る全てのことをやったらひっそりと帰る。それが自衛隊です」と。自衛隊が救助できた人は一人近くいるらしい。自衛隊員は背中にお年寄りを二人背負って両腕にお年寄り一人ずつ、合計四人を抱えてダッシュ

ユしていたそう。それなのに食事も睡眠もろくにとらず、笑顔で頑張っていた。自衛隊は日本の誇りです。●至る所でトイレ貸しますとか、休憩できますとかいうビルや飲食店が沢山ありビルの前で社員さんが大声でその旨を歩く人に伝えていた。●献血施設は被災地の方のために超満員の順番待ちでした。私欲のない列を初めて見ました。●帰宅困難者が溢れる中、車に乗っている人が「〇〇方面の方どうぞ！」と言って車に乗せ、「困った時はみんな一緒ですから」と言っていた。●ぎゅうぎゅう詰めの電車で前に座っていた女性が私の鞆を持ってくれた。●避難所で凍えるほど寒いのに、毛布を譲り合う人もいた。きちんと一列に並んで、順番を守って物資を受け取る姿に、日本人の誇りを見た。※以上、被災当初の様子を語る一般人のコメント抜粋でした。

【想定外の人生を生きる】

【法華経】には『三界は皆これ我が子なり』その中の衆生は悉くこれ我が子なり』と説かれます。仏教では慈悲が説かれ、生きとし生ける生命はみんな繋がっていて、自他を区別することはありません。つまり、他人の幸や不幸も、全て自分自身の幸や不幸に直結しているという真理をご教示されて

います。もしかして私達日本人には、想定外の出来事が起きた時に入る、真理のスイッチを具えているのかもしれない。心の中に眠っているその真理のスイッチがオンになった時、その行動は自他の区別を超越した神様や仏様のような行動を起こすのかもしれない。支え合う『絆』の大切さを知ったならば、その気持ちを忘れず大切に育てる時、想定外ではなく、普段の行動から真理のスイッチを入れ続けることが可能なかもしれない。人生のすべての行きづまりには、そこから学ばなければならぬ。「何か」があるはず。世界が脱帽した日本人の慈悲心を絶やすことなく育て、それぞれ自分に与えられた場所で磨き輝かせていきたいものです。さあ、自分の心にスイッチを入れましょう。

合掌 副住職 谷川寛敬

